

ワキ「これは一所不住の僧にて候。我此程は南都に候ひて。靈仏靈社拜み廻りて候。又あれなる寺を人に問へは。在原寺(ありわらでら)とかや申し候。立寄り一見せばやと思ひ候。さては此の在原寺は。いにしえ業平(なりひら)紀の有常(きのある)のありつね(の)息女。夫婦住み給ひける石上なるべし。風吹けば沖つ白浪龍田山と詠じけんも。此処にての事なるべし。昔語の跡訪へば。その業平の友とせし。紀の有常の常無き世。妹背(いもせ)をかけて弔らはん。妹背をかけて弔らはん。

次第

シテ「暁毎の闕伽(あか)の水。暁毎の闕伽の水。月も心や清むらん。さなきだに物の寂しき秋の夜に。人目稀なる古寺の。庭の松風更け過ぎて。月も傾く軒端の草。忘れて過ぎし古を。忍ぶ顔にていつまでか。待つ事なくて存(ながら)へん。げに何事も思ひ出の。人には残る世の中かな。唯いつとなく一條に。頼む仏の御手の糸。導き給へ法の声。迷をも照らさせ給ふ御誓。照らさせ給ふ御誓。げにもと見えて有明の。行くへは西の山なれと。眺は四方(よも)の秋の空。松の声のみ聞ゆれども。嵐はいづくとも。定無き世の夢心。何の音にか覚めてまし。何の音にか覚めまし。

ワキ「我この寺に旅居して。心を澄ます折節に。女性一人来り給ひ。これなる板井を掬(むす)び花を清め、香を焚き。あれなる塚に回向(えこう)をなし給ふ事、不審にこそ候へ。

シテ「此の寺の本願、在原業平は。世に名を留めし人なり。されば其の亡き跡もこれなる草の陰やらん。妾も委しくは知らずさむらへども。花水を手向け御跡を弔ひ申し候。ワキ「げにげに在原の業平は。世に名を留めし人なりさりながら。今は余りに遠き世の。昔語の跡なるを。かやうに弔ひ給ふ事。その在原の業平に。いかさま故(ゆえ)有る御身やらん。

シテ「故ある身かと問はせ給ふ。彼の業平は其時だにも。昔男といはれし身の。今は殊更遠き世に。故もゆかりもあるべからず。

ワキ「尤も仰はさる事なれども。こゝは昔の舊跡にて。

シテ「主こそ遠く業平の。

ワキ「跡は残りてさすがに未た。

シテ「聞えは朽ちぬ世語を。

ワキ「語れば今も。

シテ「昔男の。

初同

地謡「名ばかりは。在原寺の跡古(ふ)りて。在原寺の跡古りて。松も生ひたる塚の草。これこそそれよ亡き跡の。叢薄(ひとむらすすき)の穂に出つるはいつの名残なるらん。草茫茫として露深々と古塚の。真なるかな古の。跡懐かしき気色かな。跡懐かしき気色かな。

ワキ「尚々紀の有常の息女の謂はれ委しく御物語候へ。

序

地謡「昔在原の中将。年経てこゝに石上(いそのかみ)。古りにし里も花の春。月の秋とて。住み給ひしに。

サシ

シテ「其の頃は紀の有常か娘と契り。妹背の心浅からざりしに。

地謡「又河内(かわち)の国高安(たかやす)の里に。知る人ありて二道に。忍びて通ひ給ひしに。

シテ「風吹けば 沖つ白浪立田山。

地謡「夜半にや君が一人行くらんと覚束波(おぼつかなみ)の夜の道。行くへを思ふ心融けてよその契りはかれがれなり。

シテ「げに情知るうたかたの。

地謡「哀を述べしも。理なり。

曲

昔此の国に。住む人のありけるが。宿を並べて門の前。井筒に寄りて髻髪子(うないこ)の。友達語らひて。互に影を水鏡。面並べ袖を掛け。心の水も底ひなく。移る月日も重なりて。おとなし 恥ぢがはしく。互に今はなりにけり。其後彼のみめ男。言葉の露の玉章(たまざさ)の。心の花も色添ひて。

シテ「筒井筒井筒にかけし麿が長。

地謡「生ひしにけらしな。妹見ざる間にと詠みて贈りける程に。其時女も比べこし振分髪も肩過ぎぬ。君ならずして。誰かあくべきと。互に詠みし故なれや。筒井筒の女とも。聞えしは有常が。娘の古き名なるべし。

ロンギ

げにや古りにし物語。聞けば 妙なる有様の。あやしや名宣りおはしませ。

シテ「真は我は恋衣。紀の有常が娘とも。いさ白波の立田山。夜半(よわ)に紛れて来りたり。地謡「不思議やさては立田山。色にぞ出るもづみぢ葉の。

シテ「紀の有常が娘とも。

地謡「又は井筒の女とも。

シテ「恥かしながら我なりと。

地謡「いふや注連繩(しめなわ)の長き世を。契りし年は筒井筒。井筒の陰に隠れけり。

井筒の陰に隠れけり。

―中入―

ワキ「更け行くや。在原寺の夜の月。在原寺の夜の月。昔を返す衣手に。夢待ち添へて仮枕。苔の蓆(むしろ)に臥しにけり。苔の蓆に臥しにけり。

シテ「あだなりと名にこそ立てれ櫻花。年に稀なる人も待ちけり。かやうに詠みしも我なれば。人待つ女とも謂はれしなり。我筒井筒の昔より。真弓(まゆみ)槻弓(つきゆみ)年を経て。今は亡き世に業平の。形見の直衣(なおし)。身に触れて。恥かしや。昔男に移り舞。

地謡「雪を廻らす。花の袖。

序ノ舞

シテ「こゝに来て。昔を返す。在原の。

地謡「寺井に澄める。月ぞさやけき。月ぞさやけき。

シテ「月やあらぬ。春や昔と詠めしも。いつの心ぞ。筒井筒。

地謡「筒井筒。井筒にかけし。

シテ「鷹が長(たけ)。

地謡「生ひしにけらしな。シテ「生いにけるぞや。

地謡「さながら見みえし昔男の。冠直衣は女とも見えず。男なりけり。業平の面影。

シテ「見れば懐かしや。

地謡「我ながら懐かしや。亡婦魄靈(ぼうふはくれい)の姿は。萎める花の。色無うて匂。残りて在原の寺の鐘もほのぼのと。明くれば古寺の松風や芭蕉葉の夢も。破れて覚めにけり夢は破れ明けにけり。